

《参考資料》

完成台本

学部教育教材

博物館学芸員の仕事 ー考古学編ー

「体験学習」

VTR/29分21秒

□研究組織

ーセンター教官ー

福井 康雄（教授・主査）

高橋 秀明（助教授）

芝崎 順司（助手）

宮本 友弘（助手）

ー千葉県立加曾利貝塚博物館ー

村田六郎太

佐藤順一

秋葉光太郎

後藤和民（創価大学教授）

ー客員教官ー

木下正史（東京学芸大学教授）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）

永島正春（国立歴史民俗博物館教授）

ー研究協力者ー

安藤孝一（東京国立博物館学芸考古課長）

須藤 護（竜谷大学教授）

早川智明（埼玉県立博物館館長）

□ 基本資料

題 名	学部教育教材博物館学芸員の仕事—考古編— 「体験学習」
制 作	メディア教育開発センター（大学共同利用機関）
制 作 協 力	NHK エデュケーショナル
上 映 時 間	29分21秒
原 版	D-3・2分の1テープ
撮 影	(第一回) 平成8年8月31日(土) (第二回) 平成8年9月7日(土) (第三回) 平成8年9月14日(土) (第四回) 平成8年9月24日(日) (第五回) 平成9年1月30日(木) ※資料関係
本 編 集	平成9年3月5日(水)、6日(木) ※制作棟V2、V3 平成9年5月21日(水) ※改訂版
録 音	平成9年3月13日(木) ※制作棟・RAスタジオ ※解説 堀井真吾(青二プロ)
完 成 試 写	平成9年3月21日(金) 10時~12時

□ 画面の時間経過

(1) 開始タイトル—制作・協力— (12秒)	12秒
(2) プロローグ —加曾利貝塚博物館— (3分9秒)	3分21秒
(3) 「土器づくり」の目的と意義—「体験学習」発足の経緯—(5分43秒)	9分4秒
(4) 「土器づくり」の準備—学芸員の役割— (2分51秒)	11分55秒
(5) 「土器づくり」の実際—《土ねり》から《調理》まで—(14分42秒)	26分37秒
(6) エピローグ —「土器づくり」・今後の課題 (2分)	28分37秒
(7) 終了タイトル (44秒)	29分21秒

音楽	効果	画面	時間	解説
		1	開始タイトル	(12秒)
			○制作・協力	
		2	プロローグ —加曾利貝塚博物館の概要—	(3分9秒)
	車音	○加曾利貝塚への道 閑静な住宅街の広がる、千葉市若葉区桜木町周辺— (OL)		N「千葉市郊外の若葉区桜木町。住宅街の広がる、この一角に加曾利貝塚の遺跡があります。
	鳥声	○加曾利貝塚位置図		直径130メートルで環状の北貝塚と、長径170メートルの馬蹄形の南貝塚からなる日本最大規模のこの貝塚からは、縄文時代早期の終わりから、晩期前半の約五千年間にわたる、数多くの遺構や遺物が発掘され、縄文時代についての貴重な研究成果をあげてきました。
M1		○加曾利貝塚—外部・入口看板 (OL)		
		○貝層断面観覧施設 外部から内部へ— T①W 「貝層断面観覧施設」 夥しい数の貝が積み重なった断層の間を進んでいって— (WIPE)		発掘した当時のままに展示された貝塚からは、さまざまな種類の貝や、魚の骨、また、獣の骨などが観察でき、海や山に獲物を追った縄文人のくらしぶりが窥えます。
		○竪穴住居址観覧施設		これも、発掘した縄文人の住居跡を、そのままに残して展示したものです。
		住居址の遺構を接写しながら、さらに前進していって—	(1分45秒)	
M2		○加曾利貝塚博物館 ・外観 T③W 「千葉市立加曾利貝塚博物館」		広大な遺跡の一角に、千葉市立加曾利貝塚博物館が建てられ、貝塚から発掘された資料を展示する一方、加曾利貝塚の調査研究をしたり、市民に向けた各種の文化活動を行っています。

M3

	<p>○同館一内部（常設展示室） ポイントとなる展示資料のいくつかを積み重ねていきながら、最後に、土器コーナーへー</p> <p>(OL) 土器を作る手元に重ねてー</p> <p>○メインタイトル 「体験学習」</p> <p>(WIPE)</p>	<p>(3分21秒)</p>	<p>そうした、この博物館が行う文化活動の中でも、市民の大きな関心と呼んでいるものの一つが、《土器づくり》の体験学習です。</p> <p>縄文土器を復元する、実験考古学の研究から始まり、今では、この博物館の基礎的な事業の一つとなっている、《土器づくり》の体験学習における学芸員たちの仕事を追いながら、考古学系博物館での教育普及活動の実際について見ていくことにしましょう」</p>
<p>3</p>	<p>「土器づくり」の目的と意義</p> <p>○博物館一会議室 担当の学芸員の打合わせー</p> <p>T④W 「学芸員 村田六郎 太」</p> <p>T⑤W 「学芸員 秋葉光太郎」</p> <p>T⑥W 「学芸員 佐藤順一」</p> <p>手元のスケジュール表のアップ</p> <p>(WIPE)</p> <p>○語る関係者</p> <p>T⑦W 「創価大学教授 後藤和民」</p>	<p>(5分43秒)</p> <p>(4分7秒)</p>	<p>—「体験学習」発足の経緯—</p> <p>N「今、会議室では、担当の学芸員たちが、これから始まる〈土器づくり〉の体験学習のための打ち合わせを行っています。</p> <p>現在、年間で4回行われ、この博物館の中心的な行事となっている《土器づくり》の体験学習は、一九七二年に始まり、二十年以上もの、長い歴史をもつ行事です。では、この《土器づくり》は、どのようないきさつから生まれたものなのでしょう？ 当時を知る関係者の一人に聞いてみました」</p> <p>後藤教授の話「この加曾利貝塚が保存されるようになりまして、それを活用するためには、博物館を作らなくはいけないということで、その博物館の新設の準備をですね、私、命じられまして…いかに、設計するかと、しかも事業の内容をどうするかと、で、</p>

M4

手元の土器—

T⑧W

「加曾利 E 式土器」

T⑨W

「加曾利 B 式土器」

(OL)

○回想

・研究報告書

「縄文土器の技術」

その頁が繰られて

いて—

(OL)

(6分  
39秒)

一般に博物館というと、社会教育の場であると…教育ということが全面に出ていまして、その根底にある研究、教育の内容は、実は研究しなければ確保出来ないのですが、その研究成果だけを寄せ集めて、それを解説して展示するのが博物館だという間違った認識が多いんですね。そういうのを、この博物館では、基礎的な研究を重ねて、それを自信をもって提示していこうと…しかし、この博物館でしか出来ないこと、あるいは、この博物館だからやらねばならないことは何だろうかということを、考えてみましたらですね、沢山出てきました。で、まあ、貝塚を中心とする生産活動だとかあるいは、石が出てきますが、どこから運ばれたものだとか、いろいろな基礎的な研究がありました。その中でどうしても欠かせないのが、この貝塚から、加曾利 E 式と B 式という非常にタイプが典型的なものが出てきたわけです。それによって、この貝塚の名が高まっておりますが、しかし、これは、何時でも何処でも、誰でも作れるという認識のもとに決定された、いわゆる土器の型式というのですか…果たして、これは、何時でも、誰でも作れるものかということ、誰も実証したことがないのですね。そういう研究を、やはり、この博物館でやるべきじゃないかと、そのためには、土器の製作技術を研究したいと思っていましたけれど、いろいろ、いざ始めるとなるとですね、そんなに、簡単に出来るものではないんですね。そこで、誰か指導者がいないかと、日頃、思っていたんですけども、たまたま、群馬県の桐生市に新井司郎という方がいらっしゃいまして、その方が、一人でこつこつとやっていたらというので、お会いしてみたんですね…」

N「こうして、博物館では、既に、『土器づくり』の研究を実践していた群馬県桐生市の新井司郎氏を、縄文土器製作研究所所長として招いて共同研究を行うことになったのでした。

	<p>・実験風景の写真 新井氏を中心のモニター T@W 「故・新井司郎氏」</p> <p>(OL)</p> <p>・焼成の際に、壊れてしまう土器（再現映像）</p> <p>(WIPE)</p> <p>・煮炊き際に、水漏れを起こす土器（再現映像）</p> <p>(OL)</p> <p>・実験研究ノート</p> <p>(OL)</p> <p>①完成した縄文土器モデルとなった本物の土器と比較して並べる。</p> <p>T@W 「複製土器 出土土器」</p> <p>(WIPE)</p>	<p>(9分 4秒)</p>	<p>しかし、《土器づくり》と一口にいっても、縄文土器を、当時と同じ材料を使い、同じ手法で作るというのは、決して易しいことではありません。粘土の採集から用土の作り方や焼き方に至るまで、研究者にとっては、一つ一つが初めての経験でした。</p> <p>形を作り終えて、いざ、焼いてみると壊れたり、ひび割れしたりしてしまう土器—</p> <p>ようやく完成しても、それを使って煮炊きをしてみると、水漏れをして、湯の温度が沸点に達しないために、生煮えにしかならない土器—</p> <p>実験研究は、数多くの試行錯誤を重ねながら、縄文時代と同じ生活用具としての土器を再現しようという目標に向けて、少しずつ進んでいったのでした。</p> <p>しかし、実験研究が進み、いくつかの成果も現れ始めてきた一九七一年、研究の中心人物であった新井氏が突然に亡くなったため、その翌年の一九七二年、氏の遺志を継ぎ、その研究成果を踏まえて、体験学習としての《土器づくりの会》が発足しました。そして、市民も参加して、一緒に、共同研究を行うことになったのです。</p> <p>出土した土器を手本として、新井氏が製作した複製土器—</p> <p>…このように、体験学習は、それまでの《土器づくり》の実験研究の成果を生かすために、あくまでも、創作ではなく、出土資料に忠実な、しかも、土器の基本機能である煮炊きのできる土器を作るということを基本理念として始められることになったのです」</p>
4	「土器づくり」の準備	—学芸員の役割—	(2分51秒)
車音	①丘陵地帯の道 学芸員たちを乗せた		N「《土器づくり》の体験学習に使う粘土を求

<p>セミ の声</p>	<p>車が行く。  (OL) ○胎土の採集地 学芸員たちが、スコップで、丘陵地の土を掘っている。  (WIPE)</p>	<p>(11分 55秒)</p>	<p>めて、学芸員を乗せた車が採集地へと向かいます。  加曾利貝塚の体験学習では、縄文人と同じ条件で《土器づくり》を行うために、材料となる粘土も、遺跡のある、千葉市内の土地のものを採集して採集しています。 このように、《土器づくり》の体験学習を行う準備こそが、ポイントとなってきます」</p>
<p>5 「土器づくり」の実際 —《土ねり》から《調理》まで— (14分42秒)</p>			
<p>作業</p>	<p>○博物館 会議室—外部 T⑩W 「一日目 —素地土づくり」  ○同 会議室—内部 オリエンテーションの講義。 講座の基本理念にかかわる話を熱心に聞く参加者たち—  話を続ける講師—  ○旧大須賀住宅 —外部 博物館から住宅の方向へパン T⑬W 「旧大須賀住宅」 (OL)  ○旧大須賀住宅 —内部</p>	<p>(12分 57秒)</p>	<p>N 「一日目のオリエンテーションが始まりました。《土器づくり》の体験学習は、十八歳以上の千葉市在住者・在勤者を対象に行われますが、今回の応募者は約六十人—その中から選ばれた二十人が、この講座に参加しています。  このオリエンテーションでは、まず、《土器づくり》を、なぜ行うのか?…といった《土器づくり》についての基本的な考え方が、説明されていきます。  そして、約一時間にわたるオリエンテーションの後、会場を、博物館の裏手にある移築した古民家に移して、《土器づくり》の最初の段階である《土》づくりに入ります。  まず、あらかじめ、用意された一人2kgの</p>



音	<p>・素地上の混合—</p> <p>・素地土と水との混合—</p> <p>・素地土のねり—</p> <p>ねる人々</p> <p>(WIPE)</p> <p>ねる手元</p> <p>仕上がった粘土</p> <p>・素地土のねかせ— 袋に入れる</p> <p>棚に収める</p> <p>(WIPE)</p> <p>○二日目の作業場 旧大須賀住宅 内部—</p> <p>T④W 「二日目 —成形・施文—」</p> <p>・成形についての説明</p>	<p>粘土と1 kgの砂とを、よく混ぜ合わせていきます。</p> <p>そして次に、配合した土に、約1リットルの水を加えて、さらに、よく混ぜ合わせていきます。</p> <p>いよいよ、ねりの段階です。</p> <p>水と混ぜ合わせて、一塊りにした土を、今度は、親指の付け根に体重を乗せながら、丹念に練り上げていきます。</p> <p>この《ねり》によって、土の中の気泡が、外に押し出されることとなります。《ねり》が不足して、気泡が土の中に残ったりすると、焼き上がった時のひび割れの原因にもなるだけに、十分に時間をかけて、丁寧に練り上げることが必要です。</p> <p>こうして、昼休みを挟んで午後四時まで、第一日目の作業は、土の中の気泡が完全に抜けるまで、ひたすらに各自の粘土を練り上げることに費やされます。</p> <p>よく練り上げた土は、最後に、乾燥しないようにビニールの袋などにしまえます。</p> <p>そして、土全体をなじませるために、数日間、このような暗く涼しい場所にねかせる処置をして、一日目の作業は終わることになります。</p> <p>二日目は、土器の形を作っていく成形の作業です。 作業に当たっては、本格的な成形にかかる前に、まず、練習のための土器づくりを行います。</p>
作業音	(16分 53秒)	

	<p>・底の成形—</p> <p>・粘土紐の積み上げ—</p> <p>・アドバイスする指導員</p> <p>熱心にアドバイスを聞く人々—</p> <p>(WIPE)</p> <p>・モデルを見ながらの成形</p> <p>仕上がっていく土器—</p> <p>・縄での文様づけ— (OL)</p> <p>○カラムシの葉 T⑤W 「カラムシ」 (OL)</p> <p>・貝殻や篠竹での文様づけ—</p> <p>さらに、文様づけの作業を進める受講者たち</p>	<p>前回、よく練り上げてねかせておいた粘土を取り出して、底の部分を作ります。</p> <p>そして次に、粘土で紐を作り、それを、底の部分から積み上げて紐と紐との間を、丹念につぶしてつないでいきます。粘土が乾きやすいだけに、熟練した技術や経験が必要とされる作業です。</p> <p>参加者にアドバイスをを行う、担当の学芸員—このように、各自の進み具合を見ながら、適宜、サポートしていくのも、学芸員の大切な仕事の一つです。</p> <p>こうして、練習の段階で、成形のコツを一通り身につけたところで、いよいよ、本格的な土器づくりへと入っていくのです。</p> <p>本格的な土器づくりに当たっては、それぞれ、自分の作りたいモデルの土器を選んで、その形に沿って、成形を進めていくこととなります。</p> <p>しだいに、形の整っていく土器—こうして、全体の形が出来上がったところで、最後に、土器の表面に文様を付けていくこととなります。</p> <p>土器に縄目の文様を付ける作業—この縄目の文様をつける道具には、縄文時代にも、使われていたとされるカラムシの植物繊維で作った縄が使われます。</p> <p>また、モデルの文様によっては、貝殻や、このように篠竹を割いた道具が使われることもあります。 この篠竹なども、当時よく使われていたと想像される道具の一つです。</p> <p>このような工夫も、土器を作るに当たっては、使う道具なども出来るだけ実際に近いものを用いるという考え方で進められてきた、実験研究の成果を反映したものといえるでしょう。</p> <p>(21分 14秒)</p>
--	--	---

<p style="text-align: center;">作業音</p> <p style="text-align: center;">M5</p> <p style="text-align: center;">↓</p>		<p>○三日目の作業場 旧大須賀住宅 内部 雨の軒下に一</p> <p>T⑩W 「三日目 一つぶし・磨き一」</p> <p>・作業する参加者たち —</p> <p>・つぶし—</p> <p>・みがき—</p> <p>T⑪W 「磨きの道具として、 貝殻のかわりにプラスチックのような現代の道具を使うこともある」</p> <p>アドバイスを受けながら作業を進める人々—</p> <p style="text-align: right;">(WIPE)</p> <p>○貝塚・屋外施設 雨の中を歩く受講者たち—</p> <p>○貝塚・屋外施設 貝層観覧施設や常設展示を見学する人々—</p>	<p>(23分)</p> <p>(23分 35秒)</p>	<p>三日目には、つぶしと磨きの作業に入ります。</p> <p>《土器づくり》の体験学習の原則の一つは、見かけの形ばかりでなく、実際に使える土器を作ることです。そのためには、形を整えた土器を、水漏れがせず、十分に煮炊きの出来るものに仕上げるといふ、このつぶしと磨きの作業は欠かせません。</p> <p>生乾きの土器の内側を、ハマグリの殻などを使ってつぶし、凹凸をなくしていく作業—</p> <p>さらにその上を、ハマグリやボールペンのキャップなどのプラスチックの道具で磨きあげていく作業—こうした《つぶし》と《みがき》の作業を、徹底的に行い、土器の表面や内側を出来るだけ緻密な状態にすることで水漏れを防ぐのです。</p> <p>水漏れのしない、実際に煮炊きに耐えられる土器を作るために欠かすことの出来ない、この《つぶし》や《みがき》の手法も、実験研究の段階で、何回も実物の土器を観察したり、試作を繰り返したりして固まってきたものです。</p> <p>三日目の午後に行われる、博物館の内外の見学会—</p> <p>こうして、縄文文化についての知識を深めることで、共同研究としての《土器づくり》の意義を体得してもらおうというのが、そのねらいです。</p>

鳥の  
声

(WIPE)

○四日目の作業場  
旧大須賀住宅  
前庭—

T⑧W

「四日目—焼成—」

・焼成の準備—

・空焚き—

・土器の設置

(WIPE)

オキ火に入れられて  
いく土器—

(OL)

・薪の積み上げ—

(OL)

時とともに、真っ赤  
に熱せられていく土  
器—

・底の部分の焼き上げ  
—

(WIPE)

・焼き上がった土器の  
取り出し—

四日目の最終日は、いよいよ、土器の焼き上げです。まず、焼き上げの前に、2週間をかけて乾かしておいた土器を、さらに日干しにします。

そして次に、日干しの終わった土器を、あらかじめ焚き火をして、地面の中の水分を抜いておいた火床のまわりに並べて、さらに乾燥させます。

こうして、土器を暖め、よく乾燥させたところで、はじめて、その土器をオキ火の中に立てます。

そして、土器が、オキ火の熱で黒ずんできたところで、その周りに薪を積み上げて、本格的な焼き上げにと入るのです。

焼き始めてから、凡そ三十分—焚き火の温度は、850度から950度にも達してきます。土器の上半分は、もう、ほぼ焼き上がりです。

上半分が焼けたところで、土器を横に倒し、今度は底の部分を焼いていきます。

このように、窯を使わずに、地面の上で土器を焼く方法を野焼きといいます。これも、縄文時代には窯跡が残されていないところから、恐らくは、縄文時代も、この方法ではなかったろうかと考えて、取り入れられた焼き方です。

ようやく、焼き上がった土器。自分の土器が、どのように仕上がっているか、参加者にとっては、期待と不安の入り交じった瞬間です。

	<p>・出来上がった土器—</p> <p>(OL)</p> <p>・調理 土器に、水や魚など を入れ、焚き火で煮 始める。</p> <p>(WIPE)</p>	<p>(26分 37秒)</p>	<p>焼き上がった土器の中には、折角、延べ四日間をかけて完成したものの、この段階で、壊れたり、ひび割れしたりしているものもあります。</p> <p>また、うまく焼き上がったとしても、それを使って、実際に煮炊きが出来なくては《土器づくり》の目的を達したということにはなりません。</p> <p>作った土器を使っての調理— どうやら、この土器は、実際の生活用具としても使えるという、《土器づくり》初期の目的の一つは達成したようです」</p>
6	エピローグ —「土器づくり」・今後の課題		(2分)
M6	<p>・調理のようすを背景に、体験学習のこれからの展望や課題について語る担当の村田学芸員—</p> <p>T⑱W 「土器づくり同好会」</p> <p>○モンタージュ</p>	<p>(28分 5秒)</p>	<p>学芸員の話「…土器作り自体は、非常に人気があります。いろんな世代の人が参加して、市民講座に参加した人の中で、その後、土器作り同好会に入ってくる。それで、十年、二十年と土器を続けていく。これ、どうしてかということ、私どもの博物館でやっている土器作りといいますのは、あくまで、縄文土器をモデルにして、創作を一切しない。それと、もう一つは、出来上がった土器で煮炊き出来る。つまり、縄文人は実用に使っていたものですから、そういったものを…ですから煮炊きを通して、ちゃんと活用出来るという、そういう土器を目標にしている。その二点が目的ですから、そうすると、結果としてですね、縄文土器というのは、いろんな縄文時代の技術を駆使して、縄文土器が作られるわけですね。そうすると、目標が非常に高い物になりますので、当然、奥の深い作品になります。ですから、私どもの参加者の状況というのは、今後も、ずっと続いていこうと…で、将来像としては、やはり、そういう土</p>

	<p>土器づくりに励む人々 (土ねり、成形、みがき、完成した土器…)</p> <p>(OL)</p>	<p>(28分 37秒)</p>	<p>器作りを通して、縄文時代の生活だとか実像に迫ろうというのが、私どもの体験学習の目標ですから、そういう意味でいえば、非常に遠い目標にコツコツと続けていく。ですから、十年後、二十年後にも、同じように、私どもは土器作りを続けて、また、新たな参加者を加えてやっていくということですね…」</p>
<p>7</p>	<p>終了タイトル</p>		<p>(44秒)</p>
	<p>○燃えさかる炎 その上に重ねて— T@W 「学部教育教材作成研究会」</p> <p>安藤孝一 (東京国立博物館) 木下正史 (東京学芸大学) 白石太一郎 (国立歴史民俗博物館) 須藤 護 (竜谷大学) 永嶋正春 (国立歴史民俗博物館) 早川智明 (埼玉県立博物館)</p> <p>千葉市立加曾利貝塚博物館 村田六郎太 佐藤順一 秋葉光太郎 後藤和民 (創価大学教授)</p> <p>メディア教育開発センター 福井康雄 高橋秀明 芝崎順司 宮本友弘</p>		

		<p>制作協力  (株) NHK エデュ  ケーショナル</p> <p>制作スタッフ  脚本演出  福井康雄  撮影  黒柳 満  柳田義和  照明  山田達也  技術  安藤秀厚  制作進行  黒柳周一</p> <p>(OL)</p> <p>学部教育教材  博物館学芸員の仕事  体験学習</p> <p>終</p> <p>(画面溶暗)</p>	<p>(29分  21秒)</p>	
--	--	--	-----------------------	--